

日頃の教育に対する工夫、及び今後の教育への抱負

西本雅人

「THE TEACHER OF THE YEAR」を頂き、ありがとうございます。2年連続でこの賞を受賞できたことが嬉しいです。昨年の受賞時のことばで「福井大学の学生の建築力を北陸で一番にしたい！」と冒頭に書きました。最近では外部から来た人に「福井大の学生の建築が良いね」と言っていただけたり、上級生の学生から「下級生の作品のレベルが良すぎてやばい…」と声が聞こえてきたりと、建築力の底上げを実感しつつあります。今年新しいことを2つほど行ったので紹介させていただきます。

「ポスターセッションでの作品発表」

建築・都市環境工学科では前期・後期に2～3回の設計課題を行います。提出日には全員に向けて作品を発表するのですが、私が担当した課題でポスターセッションによる発表を試しに行いました。2つのグループに分けて、掲示した作品の前に立って学生同士で説明役と聞き役を行う形式です。そこに私たち教員やゲストの建築家、上級生も聞き役として参加します。説明役の学生は1時間で何十人にも説明し、自分の作品に対してコメントがもらえます。また聞き役の学生は友達の作品のプレゼンを聞いて、良いプレゼンのためには何が足りないかに気づくことができます。学生同士で意見交換できたので、結果的にこの発表形式はとても良かったです。毎回やるとマンネリ化する恐れもあるので、定期的にこれからも取り入れていきたいと思っています。

「ゲスト建築家による講評」

学生の作品発表の場に地元の建築家を招待して作品の講評をしていただきました。3年生では小中学校の課題で1人、2年生ではカフェの課題で1人、こども園の課題で2人、記念館の課題で2人。学生にとっては実際に設計で活躍している建築家の方から生のコメントをもらうことができる機会でもあるし、教員にとっても課題の設定や指導が試される機会でもあります。学生の作品を外部へ発表していくためにも建築家との関係を強めていきたいと思っています。

今回の投票の対象である3年生は、私が福井大学に着任した際に入学してきた学年でもあり、特に思い入れがあります。1年生のころから設計を教えてきて、とても明るく前向きに製図や設計に取り組んでいる学年だと思います。模型の腕はピカイチな学生、模型の腕はイマイチだけど模型が評価される学生、環境技術を主とする設計アプローチを得意とする学生、かわいいプレゼンが上手な学生、元気いっぱい周りを巻き込むことが上手な学生…、挙げだしたらきりがありません（笑）。

そんな学生との印象的なエピソードを紹介したいと思います。

夏休みに「たまご展」という北陸の学生を対象としたアイデアコンペがあり、教員から「応募してみたら？」と学生に呼びかけていました。参加した学生の中である学生は結果的には振るわず、無理に応募させて辛い思いをさせたかなあと心配していたのですが、後日その学生と会った際に「良い建築作品がつかれなくて悩んでいたけど、同年代の他大学の学生と話せたことや、作品を見たことで前向きに頑張れるようになった。応募して良かった」と話してくれて、その成長に嬉しくなりました。その学生は先日行われた全国卒業設計展でも一人で最後まで作品を見ており、着実に建築の考えを吸収しようとしていると感じました。

学生はふとしたきっかけで成長してくれると改めて気づきました。そんなきっかけをたくさん与えることができる教員を目指してこれからも頑張っていきたいと思っています。